

分科会 7

精神医療サービスの「見える化」を未来から語るプロジェクト

進行：相澤和美（地域精神看護ケアねっと／国際医療福祉大学大学院）
佐々木理恵（一般社団法人 WING-NETWORK 多機能型事業所すべいり）
澤田高綱（一般社団法人てとて リンクよこはま訪問看護ステーション
／NPO法人 共に歩む市民の会 生活支援拠点ほっとぽっと
／瀬谷区障害者地域自立支援協議会（せやまんまるねっと））
大橋秀行（NPO法人精神科作業療法協会／埼玉県立大学）
川口敬之（NPO法人精神科作業療法協会／北里大学）
スーパーバイザー：白木孝二（Nagoya Connect & Share）

【分科会の概要】

本分科会は、精神医療サービスにおいて実現が難しい「見える化」を、参加者の“悩みごと（Worries）”として、未来から語るダイアログ（対話）により、行動プランを立てる対話方式を取り入れました。精神医療サービスの「見える化」によるリカバリー志向への転換は、本人・家族・専門者の対場の違い、関係部門の意思疎通の悪さ、不信感などによって行き詰まっている現状があります。

今回用いた未来語りのダイアログ（Anticipation Dialogues；AD）のプロセスでは、悩みごと（Worries）”から発想を反転して、まず「見える化」の望ましい未来を想像します。次に、その「見える化」が実現した未来にタイムスリップして、その時点から実現に至るプロセスを振り返ります。そしてその時々支援してくれた人、得られた支援内容を浮かび上がらせることで、複雑に絡み合っていた膠着感がほどけていく体験をすることができました。

分科会参加者の後日談として、実際に精神医療サービスをリカバリー志向に転換していく方策に取り組み始めたとの報告も聞かれています。ADによるダイアログを通じて、膠着状態の精神医療サービスの「見える化」が解きほどこかれ、お互いの未来への希望につながる体験、また、具体的な行動プランを見出していくという刺激的な機会となりました。

AD で取り上げたテーマ

- ①行動制限（隔離・身体拘束）が見えない
- ②当事者個々のニーズを支援に反映できない
- ③リカバリー志向の考え方が浸透しない
- ④当事者中心のチーム医療が難しい
- ⑤当事者主体の意思決定支援ツールがない

分科会の様子

①みんなで未来にタイムスリップ！



②AD による対話

